あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 45 号
発行日
2025.02. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
（井上講四宅）
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○シンギュラリティ（技術的特異点）が近づいている?!

新年も一月が過ぎて、まさかこんなことを書こうとは夢にも思わなかったが、実は、迂闊にも?とんでもない言葉に出くわしてしまった!それが、標記の「シンギュラリティ（技術的特異点）」というＩＴ用語である。昨今のＡＩの爆発的な進展について、一度は私なりに考えてみたいと思ったので、ここに書き始めた次第であるが、だが、実際は、私には、まるで異次元の世界のことのようである!だから、その言葉は、何か未来の人工怪獣みたいな名前のようだとも思ったが、意味（定義）は、「人間の知能を超えたＡＩが誕生する仮説のことで、ＡＩと呼ばれる人工知能が、日々学習を繰り返して、いつの間にか人間を上回ってしまう?その時点」ということらしい（それが、２０４５年とも!）。

そんな馬鹿な?と、旧世代の私は改めて思うのであるが、「とくに、近年では人間との会話が成り立つチャット機能や、精度の高いイラストを作成するクリエイティブ機能が発展しており、ますますシンギュラリティへの関心が高まっている」とある!さらに、「テクノロジーというパワーと莫大な金を手にした、テックビリオネアたちの野望には限りがない。こうしたイノベーションはもちろん素晴らしい。しかし懸念されるのは、政府の介入や規制を嫌い自由を最高の価値とするリバタリアン的な考えを持つ彼らが、『置いていかれる』人々のことを全く考えていないということだ。」ともあった（ネット情報より）!さらに、それが先鋭化している?

詳しいことは、ここでは書けないが、その懸念は、着実に、そこかしこにある!そして、それは、経済のみならず、政治の中心にまで襲い掛かって来ている?果てさて、どうなる?

○久し振りの再会!だがそこに世話人がいればこそ!

過日（一日）、久し振りに、卒業生達（子ども地域教育コース一期生４人：男１人／女３人）が、我が家を訪ねて来てくれた!この若者達は、比較的最近の卒業生達で、神奈川県に住むＳ（旧姓Ｋ）さん（小学校教員）が、家族（夫と子ども１人）と一緒に沖縄に来るのをきっかけに、県内在住の同期３人に呼びかけたようである。なお、４人のうち３人は、子連れでの訪問であったので（乳幼児が４（＋０・５?）人）、さしずめ我が家（岳陽舎）は、ミニ保育所状態であった。余談ではあるが、ある事情で気になっていたＦ君も来た。しかも、二児の父親として!彼とは、また近いうちに、再会することを約束した。

いずれにしても、時は流れたものである!考えてみれば、彼らの生活状況も、そしてまた生活意識も、目まぐるしく変転し、当時の学生生活とは違って、大変な日々を送っていることであろう?今月もまた、別の（こちらはいつもの?）卒業生達が来る!嬉しい（否々、有難い?）ものである（もちろん、まったく音沙汰のない卒業生達もいる!こちらが、当然ながら圧倒的に多い?）。ちなみに、先月末（１８日）、これまた久し振りに、高校の同期とのズーム交流を行ったが、１１月に沖縄で集まることになった!

どんな再会となるのか、楽しみではあるが、とにかく、旧知の人と出会えるのは嬉しいものである。世話役のＫさん（福岡在）は、毎回、このような場（旅行）を企画・調整してくれる人であるが、やはり、そうしたアクティブな（呼びかける）人（世話人）がいないと、こうした再会は実現しない!本当に、感謝の一言である!

○こんな凄いことをやっている所がある!そこにはやはり…

ひょんなことから、ある情報を得ていたが、調べてみると、大変なイベント（否、それを遥かに超えている!）であることが分かった!それは、「Kumamoto Education Week」というものであるが、その内容は、「〝教育ＤＸ〟をはじめとする『学び』にまつわる様々なテーマでのトークセッションの開催や、学生や民間企業と連携した若者の居場所づくりの取組紹介、アーティストやユーチューバーとのコラボ企画、民間団体との連携による体力向上プログラム紹介など、企業・民間団体・大学等と連携した取組」で、「YouTube 動画５０以上、対面イベント２０以上、計７０以上のプログラム」である（実際は、それ以上!）。目的は、「Well-being を実現するための教育について多様な社会の参加者と共に考え、行動することで世界の教育振興に貢献するため、『みんなの夢が未来を創る』をテーマとした教育の祭典」ということである!

ここで力説したいのは、これを実現させたＥ教育長と、Ｏさんという「人」の存在である!Ｅ教育長さんについては、興味があったので、これも事前に調べていたのであるが、その経歴が、真に仰天もの?詳しいことは書けないが、以前熊本県教委の社会教育課長もされた、元文部官僚（途中で起業された）であった。「子どもの『将来のために』が引き起こす教育の盲点、今の幸せのため自ら考え行動する教育委員会へ。『主体的・対話的で深い学び』によって、はたして予測困難な時代を生き抜くことができるのか。まさに予測困難な時代の象徴ともいうべき新型コロナウイルスの感染拡大に直面して、『今後も子どもたちはこのような時代を生きることを体感した』。コロナ前とは教育に対する考え方が大きく変わった。今後どんな学校、どんな教育を目指しているのか。矢継ぎ早に施策を打ち出す熊本市の改革」という評もあった。

一方のＯさんは、根っからの市職員で、社会教育畑で長年奮闘されてきたという。結果的に、この両者の出会い（タッグ）が、この凄い取り組みを実現させたということであるが、沖縄の２人がそれに協力していることもあって、過日（５日）、彼に、「okinawa 教育協働アカデミー」にも参画してもらった。素敵な公務員であった。やはり、そこには、「人」がいるのである!　（井上）☜

○「ＤＰ」とは何だ？思い当たらないわけでもない⁉

これまた最近、ネット上で気になる（本来の意味で？）言葉がある。それは、「ＤＰ」、すなわち「ディープ・ステートdeep state」（闇の政府、地底政府）という言葉であるが、多少調べてみると、「アメリカ合衆国連邦政府の一部（特にCIAとFBI）が金融・産業界の上層部と協力して秘密のネットワークを組織しており、選挙で選ばれた正当な米国政府と一緒に、あるいはその内部で権力を行使する隠れた政府（国家の内部における国家）として機能しているとする陰謀論である。『影の政府』と重複する概念でもある。」とあった（ウィキペディアより）。

もちろん、ここでは、その用語の歴史的背景や、米大統領のＴ氏に関わるような政治状況（陰謀論の有無）に、直接コミットする気はない（そもそもよく分からないし、分かりたくもない？）。ただ、それに関するようなこと、例えば、「既得権益」を巡る攻防？あるいは、与党（保守）対野党（革新）というような文脈であるならば、それは、何も米国だけの話ではないし、どこの国でもあることであるので（ひょっとしたら、どこの組織でも？）、私（堂本）なりに、そのようなことに思い当たらないこともないのである⁉

ただ、問題は、その攻防において、何らか（誰か）の裏（影）の意思が働いて、その渦中にいる人間が、ある事件のために（デマやスキャンダルを含む）、その表舞台から退場させられることがあるというようなことである⁉これもまた、そのＤＰの仕業であるということであれば、話は別である⁉要は、そこに、誰かの思惑が絡んでいるということであり、既得権者や、その事案がそうなって欲しくないと思っている人間達の、言わば「暗黙のタッグ（見えない鎖？）」が、そこに出来上がっているということである⁉

困ったものではあるが、今後、そうしたＤＰは、表にあった「シンギュラリティ」の登場によって、さらに複雑、巧妙にもなっていく？しかし、「善なるＤＰ」もあり得る⁉それが、本当の「人間の英知」でもあると信じたい！

○世界は錯覚で出来ている？ＡＩは、それにどう対処？

もう随分時間が経ったが、やはり、このことも触れておきたい。それは、例のＮＨＫＢＳ番組「FRONTIERS　その先に見える世界」のことであるが、今回の話題は、「世界は錯覚で出来ている」である（初回放送日：２０２４年１０月３１日）。それによると、「目や感覚をだます錯覚現象の数々。『なぜ錯覚は起きるのか？』研究の先に、人間、そして私たちを取り囲む世界の正体が見えてくる。錯覚を自在に操る先の未来とは？」であった。

『錯覚』それは、見た物が実際と違うように見えたり、無いはずの物をあると感じたり、何か感覚に異常が起きたように感じるもの。しかし、研究者は語る『見た物が正しく見えることの方が不思議なのだ』と。そもそも私たちの脳は、どうやって世界を感じているのか？錯覚という現象を知れば知るほど、人間とそれを取り囲む世界の正体が見えてくる。そして錯覚を自在に操った先に待つ未来とは？」とあったが、「錯覚があればこそ、人は生きられる？」ある意味、それは、正鵠を射ているかもしれない⁉

〈短歌に託して～ＤＰ？錯覚？されどあるが儘の我！～〉

・予想外の保育所状態！
　それにしても　時は過ぎたものである！

・怪獣を思わせる　シンギュラリティ？
　ある意味それは　当たっている？

・とにかく凄いことが　起きていた！
　やはり事は　人が起こすのである！

・ディープ・ステート？　何でそのようなものが！
　善なるそれは　あり得ないのか？

・錯覚があればこそ　生きられる？
　であればＡＩは、いかに人脳越える？

〈特別コーナー～堂本彰夫の古代史旅枕 ㊺～〉

○改めて、古代九州の全体像を探る－その１６－

翻って、その「豊国倭国」を支え？ていた「息長氏」や「秦氏」等は、一方で、近江・北陸等に本拠地を移し、琵琶湖・淀川水系を抑え（豊国）倭国のレガシーを引き継ぎ（継体し）、「男大迹ヲホド（彦太尊？）」を「継体天皇」にすり替え、その王権を確立したように見せた⁉だから、彼らは、書紀の編纂（史実の捏造？）に積極的に関わった⁉ちなみに、「息長氏」の姫巫女である「神功皇后（息長帯姫）」の英傑物語は、それを大いに盛り上げるための所業でもあった⁉

ということで、我が国の古代史（建国史）は、まずは北部九州に確立された「倭国」が、西日本全体（影響としては関東にも及んでいる？）を舞台にした「倭国大乱」によって、二極分化していったことから始まる（初因は、「伊都国」と「邪馬台国」による「奴国」への攻撃？）⁉すなわち、北部九州での覇権争いに敗れた「奴国」勢力の主流が、吉備や出雲に移動、そして、当地の勢力を抱き込んで近畿大和（纒向）に移動し、新しい連合勢力を構築し（↓纒向祭政都市）、他方では、その一部勢力（権力争いに敗れた多氏族？）が、新たに形作られていた邪馬台国連合に徐々に入り込み、北部九州（筑後地方）には、言わば「新倭国（筑紫倭国）」が形成された⁉

そして、その後、その「新倭国」は、６世紀前後に、筑紫倭国（本家）と豊国倭国（分国）に分かれ、さらにその後、豊国倭国は、筑紫倭国（本家）と袂を分かち、移動して、「近畿倭国」として、旧来の勢力を糾合し、新た（別！）な倭国（日本国）を創り上げた⁉それが、かの（「記紀」が示す！）「継体王朝」であり、その後の顛末ということである（基本的には、現皇統は、そこから始まっている？）⁉その意味で、我が国の古代史（建国史）は、「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋という意味合いをもつということであるが、ただし、それは、あくまでも近畿倭国（倭国＋新倭国＋豊国倭国＋日本国）からの説明軸であり、消された（隠された？）筑紫倭国（本家）の実相、そしてそれの、その後の推移については、ほとんどが知らされていないということなのである⁉だから、問題なのでもある！　（つづく）（堂本）

《編集後記》義母（１０１歳）の死の連絡があり、急遽鳥取に行っていた。親族が一堂に会するのは滅多にないが、これもまた人の世の習い、絆を改めて感じさせてもらった。中国山地の山間の町には、かなりの雪が残っていた！（井上／堂本）